

2001・9・11

その二週間後、9月26日・・・

筑波大学でニューヨークの美術事情についての特別講義をしていただいた。



住居とアトリエのある Westbeth のビル屋上から(後方は The World Trade Center)

佐藤正明氏特別講義

ニューヨーク美術事情

平成 13 年 9 月 26 日 午後 3 時 15 分開演
筑波大学体育芸術専門学群棟

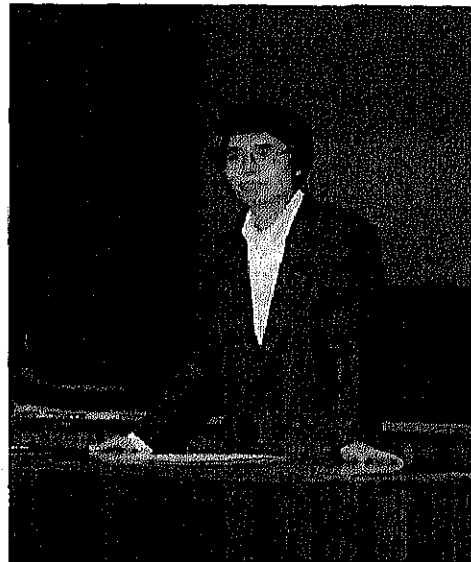
講師

佐藤正明 (アーティスト)

司会

守屋正彦 (筑波大学助教授)

1. 作品 VTR
2. 講演
3. 質疑応答



佐藤正明氏

司会：どうぞ、佐藤正明さんです。(拍手、佐藤氏入場)

今日の話は、冒頭にニューヨーク(以下 N.Y)のマンハッタン、貿易センタービルも出てきます。日本の芸術の評価システムと違う評価や、N.Y のソーホーやチェルシー、現代の場所との関わりなど、色々な事もお話の中に出てきます。国内だけの評価システムに無い部分で、我が国から目を離して、N.Yの世界を、今日は佐藤さんに特別講師として——今N.Yの惨状が大変ですけども——、来て頂きました。

冒頭、恐縮ですが、貿易センタービルのすぐ近くに、佐藤さんのお住まいが在ります。多くの犠牲者のために、最初に黙祷を捧げたいと思います。ご起立願います。

では、20 秒程度。

多くの民族が犠牲になりました。黙祷。

(黙祷)

黙祷止めて下さい。着席して下さい。

佐藤さんはN.Yを主題にした作品で、「穴の佐藤」として、N.Yの中へ、“New York Times”等で評価されて、今日まで制作を続けてきております。その中でサクセスとか、聞いて頂けると思います。

今日は五時までご講演で、その後二十分程度、皆さんから質問を受けたいと思います。では、先生よろしく願いいたします。

佐藤：今守屋先生に紹介して頂きました、佐藤正明と言います。

守屋先生に「話して下さい」と言ったことが一つ抜けていまして、一つは、私は若い内に日本を出まして、郷里は山梨県甲府市です。それで、方言が結構入っているのですよ。郷里の人に言われまして、「今でもそういう方言は使っているのだろ」と言いましたら、「そんなのは50年以上前に死語になった方言だ」と言われました。ですからそういう言葉で分からない言葉がありましたら、パッと手を挙げて下さい。そうしたら、標準語に直していきます。もう一つは、幸いにも、N.Yに渡ってから、絵で生活できるようになりましたので、毎日スタジオに行って絵を描いているので、絵の方は、少しは自信があるのですが、話す方は、時々喋りたいことを説明するのに、回りくどかったり、他の話に行っちゃったりします。あまり普通の講師のように起承転結がちゃんとあるような、そういう方ではありませんので、聞く方もそういう覚悟で聞いて下さい。

同時多発テロ事件

今回、皆さん全員が知っているかと思うのですが、ワールド・トレード・センターの——同時多

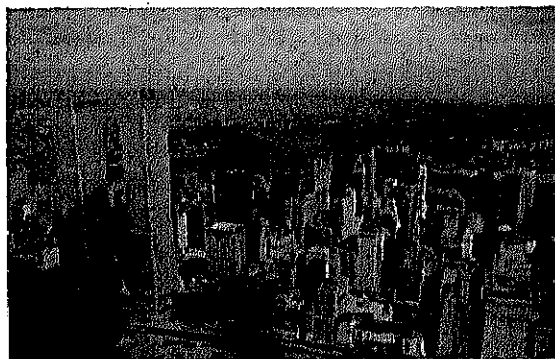


写真 1 70年代のマンハッタン(左がWTC)

発テロと呼ばれてはいますが——それが起きまして、ちょうど私は日本に居て、私の家族はN.Yに居たのですが、子供が二人居まして、皆さんと同じ、美術大学生です。一人はサンフランシスコの美術大学で、もう一人はN.Y郊外のN.Yステート・カレッ

ジに行っています。二人共そちらに行っていましたので、ワイフ（佐藤聖美、アーティスト）だけマンハッタンに居まして、ワールド・トレード・センターから約二キロ——歩いて25分くらいの距離に住んでいます。後でスライドにN.Yの風景がいっぱい出てきます。それを見て頂けると、マンハッタンの概念なんかが分かると思うのですが、とりあえず、最初の警戒地域に私の家は入りまして、ワイフの話だと、州兵が全部入口を固めまして、出入りの際は全て身分証明書を出さなくてははいけない。それが約5日前に解除されたということで、少し自由になりましたが、やはり私の家はハイウェイ沿いで、ワールド・トレード・センターへ向かう所ですので、ハイウェイが今でも瓦礫を積んだトラックが延々と毎日続いているという状況らしいです（写真1）。

事件が起きてすぐに、私はちょうど山梨県のローカルのテレビが私の為の番組を、事件の次の日に計画していたのですが、あの事件で、突然報道が入ってきました。私もちょっとN.Yのことを喋ったりしたのですが、その夜ワイフは10チャンネルの"NEWS STATION"にN.Yで出演していました。ですから私はローカルな方だったのですが、ワイフは全国ネットで、友人たちが結構見っていました。「あ、無事だったのだね」と、山梨県の甲府市まで、北海道から九州まで色々な電話が来まして、今現在は私よりワイフの方が日本では知れ渡っているのです。

今後の計画では、ついこの間私が所属している画廊から連絡が入りまして、やはり美術界もワールド・トレード・センター・トラジディーにヘルプしようということで、N.Yの画廊が一緒になって「ベネフィットのエキシビションを10月17日から11月3日までしよう」ということで、「作品をドナー・ネイト（寄附）してくれ」と連絡が入りまして、早速私もドナー・ネイトすることにしました。そういう風に、他の色々の分野でも、「被害を受けた人たちを救済しよう」ということで、ボランティアが本当に凄いらしいです。

もう一つ、4日前に、N.Yの友人が日本に入ってきたのですが、最初の便で帰って来られて、もう一組はヨーロッパで足止めを食っていた友人がN.Yで入ってきた。みんなワイフからの情報なのですが、出るのは自由だけど——以前よりは色々検査があって大変ですけど——、入ってくるのは大変らしくて、ほんのちょっとした爪切りでも取り上げられるような警戒態勢だということです。私の友達が学校の先生をしているのですが、やはり「その子供の父兄が何人も亡くなっている」とか、そういう話が続々と私の方にも入って来ています。

今回のワールド・トレード・センターのビルは、私が1970年にN.Yに入ってきた時に、ちょうど3分の1くらい出来ていまして、その時に偶然なのですが、あるレストランで友人を介して日系の人を紹介されたのです。「建築家の山崎さんです」と紹介されて、僕は「画家の佐藤です」と握手したのですが、次の言葉が、「今作っているワールド・トレード・センターの設計者です」と。非常に驚きまして。日系二世の人です。アメリカ人の設計家と共同で設計したのだそうですが、私にしたら、若い時にアメリカに行って——まだ学生だったので、皆さんと同じ——、学生の時に日系二世の建築家が世界一高いビルを設計したということは、すごい励みになったのですよね。その励みになったワールド・トレード・センターのビル。家からすぐ傍で、これから20枚以上写真が出てきますが、非常に好きだったのが、あんな状況になって、本当に悲しかったり、悔しかったり…。そういう今の状況なのです。N.Yにすぐ帰りますが、現場を見たらどう感じるか、ちょっと恐ろしい気持ちです。

この事件を話し始めるとなかなか終わらなくなってしまいますので、とりあえず本来のN.Yのアート情報を始めたいと思います。最初はN.Yのマンハッタンの風景、そしてソーホー、チェルシー、57丁目、マディソン、この辺の画廊街などのスライドを見て頂きます。

ソーホーなんかは皆さん、よく聞いたと思うのですが、6月時点で、約135の画廊、美術館が入っています。チェルシーがここ2・3年凄くたくさん画廊が集まりまして——というのもチェルシーは、ソーホーよりずっと家賃が安くて、広いスペースがある。6月現在、180個画廊があります。私が住んでいるグリニッジ・ビレッジは、約27個、このグリニッジ・ビレッジは、ソーホーとチェルシーの真ん中です。50番街という昔から在る所は、84個の画廊、ないし美術館があります。一番古い地域、マディソン街に美術館が多いのですが、それと画廊で127個。現在N.Yでは四つの地域に分かれて画廊街が展開しています。

それではスライドをお願いします。

ニューヨーク画廊街

(スライド)

これはマンハッタンを西ハドソン川からミッドタウンから見た写真で、私たちが住んでいる、ウェストベス・アーティスト・コミュニティ・ハウジングと言いまして、芸術家だけ 385 世帯住んでいます。約 1000 人の人口。このビルが、そのビルです。このビルについては後述します。

これらは N.Y のマンハッタンを中心に撮っています。これは N.Y でもイースト・リバーです。この辺はアップタウンと言いまして、高級住宅街です。

エンパイア・ステートビル。

反対から見たミッドタウン。

ミッドタウンからダウンタウン。自由の女神。私の家はこの辺です。

西から見たミッドタウンです。

真ん中がセントラル・パークです。これがダコタ・ハウス。ジョン・レノンが倒れたところです。

ハドソン川。

ここにワールド・トレード・センターがあります。この地域は開発されて、川の中に大きい新しい街くらいのビルが建つようになりました。

ハドソン川を北に向かって見た所。

昔はここに埠頭が何百と在りまして、そこで荷を下ろして、この倉庫に入れてアメリカ各地に向かったという。ですからこの辺は倉庫街が続いていまして、倉庫が空くようになったのです。税金や土地の問題で他の州などに移って、そこにアーティストが入るようになりました。

これが国連ビルです。

ブルックリン・ブリッジ。これは古い写真で、私は昔から高いところが好きで、昔から新しい所に行くと、とにかく高い所から俯瞰したいという趣味がありまして、学生時代で貧乏絵描きだったのですが、ヘリに乗ってこの写真を撮りました。自由の女神。嬉しかったのでしょね。たくさん撮っています。

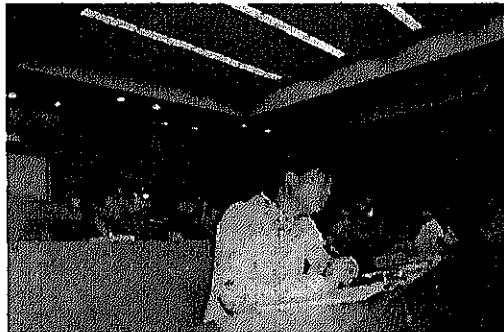


写真 2 会場の様子



写真 3 ソーホーのメインストリート

ここが全部埋め立てられて大きなビルがたくさん建ちました。ですから、三角に均衡が取れるくらい整ったダウンタウンの街並だったのですが…。今回の事件は残念です。

ウォール・ストリートはここです。

いよいよソーホー。ここはハウストン・ストリートで、ここからウェスト・ブロードウェイという通りになります。ソーホーのメイン・ストリートです(写真3)。

ソーホーからワールド・トレード・センターまではすぐです。

ここはウェスト・ブロードウェイで、スプリング・ストリートがあります。本当にソーホーのセンターです。今では土・日はすごい人で——、というのは今ではソーホーには殆どのブランドショップが入っているのですね。高級レストランも。それで家賃が高騰して画廊が成り立っていかなくなつて…、という状況があります。このフォー・トゥウエンティというビルがソーホーのシンボルだったのですが、この中にレオ・キャステリなんかが入っていました。このブロックのすぐ前が、私の所属している O.K.ハリス画廊です。

これもウェスト・ブロードウェイです。今では高級ブランド・ブティックでいっぱいです。

ブロードウェイというのはマンハッタンを縦に縦断してしまつて、いろいろな地域がありまして、有名な劇場街というのはミッドタウンにありまして、10 ブロックです。同じブロードウェイでも北の方に行くとは住宅街で、ワシントンという地域に行くと麻薬がたくさんあるような危険な地域です。これはソーホーのブロードウェイです。この辺のビルの中に、10 軒とか、画廊が入っています。

これは画廊の看板です。このくらい画廊が入っているのです。

これはハウストン・ストリートの通り。ここがブロードウェイです。

これは若かりし頃の僕です。ソーホー・センター・フォー・ビジュアル・アートと言ひまして、



写真 4 O.K.ハリス

NPO のひとつで、新人にチャンスを与えようという画廊です。これは N.Y 郊外にオールドリッチ現代美術館というのが在りまして、そこの出先機関です。私もここのお陰で、N.Y で画廊も付いて食べられるようになったと言うか、その出発の画廊です。

この隣で、美術専門の図書館で、特にアーティストに開放してしまつて、そこで美術書なんかをただで全部見ることが出来ました。

これはソーホーが始まったときのシンボルのような「絵」です。随分もう色が褪せてしまつて弱いのですが、描いた当時は結構、本物に近かったです。

これはハウストン・ストリートとブロードウェイのコーナーに在るのですが、彫刻です。ビルの繋ぎ目ではありません。ソーホーのシンボルとして、1970 年代からずっと在ります。

これはウェスト・ブロードウェイ。ソーホーのメイン・ストリートで、黒い所が私の所属する O.K.ハリス(写真4)。この隣がディア・アート・ファンデーションという 20 年間同じ彫刻を見せている所があります。

これは O.K.ハリス。畳 120 畳の 4 倍のスペースが在ります。ここはそのオフィスです。このオフィスを中までお客さんを入れて作品を見せるというのは、O.K.ハリスが初めてアメリカでシステムを始めた画廊です。480 畳敷きの広さによってこれが出来たのです。ちなみにこれは彫刻です。ドアン・ハウセンというスーパー・リアリズムの作家なのですが、現在 22 万ドルですか

ら2500万円くらい。人間より高いかもしれない。(笑)

彼と同じ頃、世界的に有名になった、ジョン・デ・アンドレアと言う女性をそっくりにする作家が1970年代にO.K.ハリスで個展をした時に、当時は窓みたいな物がウェスト・ブロードウェイに面して在りまして、こういう人たちが8人くらいの男女が裸で立っているわけです。ですから外から見た人たちは、余りにそっくりなので、「あそこでは裸でパフォーマンスをしている。ずっとそんな人たちが動かないで立っているよ」と。又ドアン・ハウセンはホイットニー・ミュージアム

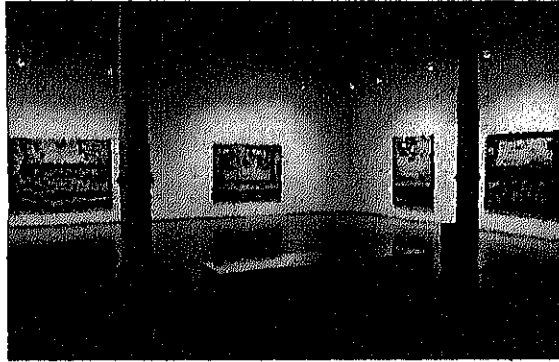


写真 5 O.K.ハリスで個展の作品

という現代アートミュージアムで個展をしたことがあるのですが、オープニングの時に、お客さんに「トイレはどこですか」と訊かれた位、本当にそっくりです。

これは僕の個展のときの作品です(写真5)。O.K.ハリスは一つの画廊なのですが、エキシビション・スペースが4箇所ありまして、1ヶ所が120畳。これが初期の個展の会場です。

これが約9m30cm くらいの大きさの絵です。狭い方の壁が9m30cm くらいの絵を掛けても横にまだスペースが在る。こちらはもっと長いスペースが在ります。

これは7枚組みの中の物を一枚ずつ撮った写真です。日本流に言ったら120号くらいだと思います。

ここがディア・アート・ファンデーションといいます。これは私の友人達なのですが、《ブロークン・キロメーター》というワルター・デ・マリアの作品です。これは真贋です。

ここはチェルシーの画廊街でこのようにビルの中にたくさんの画廊が入っています。

これは非常に大きなビルで、将来的に多くの画廊が入るのじゃないかと思うのですが、そのようなことで撮りました。

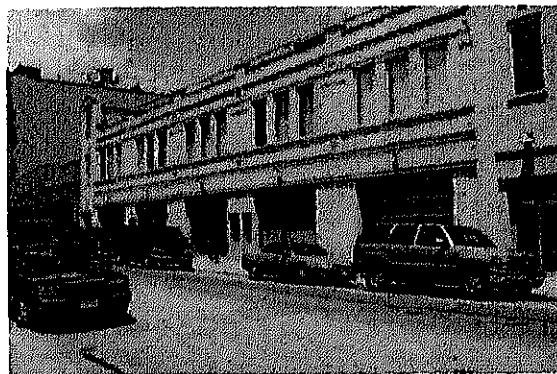


写真 6 チェルシーの画廊

これはロサンジェルス画廊にそっくりなのですが、こんな低いビルもチェルシーにも在りまして、中のスペースは結構大きいです。ソーホーの大きい画廊よりも大きいスペースがあるくらいの画廊が10軒くらい在ります。(写真6)

これは非常に大きな画廊で、日本で言ったら500号から800号。広いスペースです。

さっきロサンジェルス画廊みたいだと言ったのはこちらですね。
これらは皆チェルシーの画廊です。
これはポーラ・クーバー画廊と言うのですが、ソーホーに初めて画廊が出来たときの、3つの画廊の1つですね。それがチェルシーに移りまして、膨大に広いスペースの画廊です。
(スライド終了)

日米の美術市場の違い

まず、日本とN.Yの違いなのですが、まずN.Yには公募展というのは一切ありません。ではどうして作品を発表したら良いのかというと、画廊ないしは美術館なのです。通常美術館で発表出来るようになるということは、画廊で発表して、良い評価を受けたり活躍したりしている人たちの作品が美術館で発表されるようになるので、どうしても画廊主体になります。つまり画廊主が主体なのです。画廊主が気に入ったらどんな作品でも良いのです。ですから画廊主が「この作家を売り出そうという」気になったら一番良いケースなのですが、N.Yの場合は一つの個展が大抵1ヶ月です。夏休みがありまして、一つの画廊がもし一つのスペースしか持っていないと、一年間に10人しか個展が出来ないということになる。二年に一度の個展というのが、普通のサーキュレーションですので、その画廊は2年間、20人の作家が居れば、ローテーション出来るわけですね。それで、時々作家が出来なくなったりした場合他の作家を、ということで、一つしかスペースを持っていないと、もう30人以上は作家を抱えきれないのです。ですからそこに食い込むには誰かが脱落するか、オーナーが「ダメだこの作家は、もう夢がない」と言って、落とした時にスペースが出来るから新人が出られる。または新人を入れるために、誰かを出すという風なので、画廊に入るというのは非常に厳しい状況です。

画廊に入って、何回か個展をして評判になったりすると、ずっと画廊のメンバーで居られますので、そこで二年に一度発表ということが出来るのですが、そこに行くまでが結構大変です。

ソーホー・センター・フォー・ビジュアル・アートというようなNPOの画廊は4つ位いつも在るのです。例えばインスタレーションが主体の画廊とか、絵画が主体の画廊とか、ビデオが主体の画廊とか、色々ありまして、殆どの新人がそういう所へアプライするのです。名を成した作家というのは皆そういう所を通っているのです。そして画廊に入って、自分の地位を築く。それがN.Yの作家として成り立つ道です。

やはりN.Yの1970年代の半ばから女性が進出して来まして——作家もですが——、画廊にもたくさんいまして、ミュージアムにも女性のキュレーターがずっと多いです。

これは歴史的に見ますと、パリからN.Yに現代アートの中心が移ってもう40年以上経つのですが、アメリカで最初に画廊の壁を全部白くして、抽象表現主義——ジャクソン・ポロックなんか——を売り出したのが、ベティ・パーソン、女性の画廊主です。更に遡りますと、N.Y近代美術館、MOMAですね、あれを創設したのは3人の女性で、この女性は先見の目があって、27歳の美術評論家の男性を館長にしたのです。多分すごいハンサムじゃなかったかと思うのですが(笑)。彼が近代美術館の基礎を築きました。N.Yでは女性が非常に活躍しやすいと言う土壌があります。ミュージアムの、メトロポリタンもMOMAもホイットニーもそうですが、日本みたいに国立や州立じゃないのですよね。N.Yには市立美術館というのがありますが、それは余り人が入りません。圧倒的にすぐ傍にあるメトロポリタン。一日1万何千人と言う人が入りますから、やはり日本は国立とか公の所が強いのですが、向こうは反対です。

次に日米の、美術教育の違いと言うのを話したいと思います。

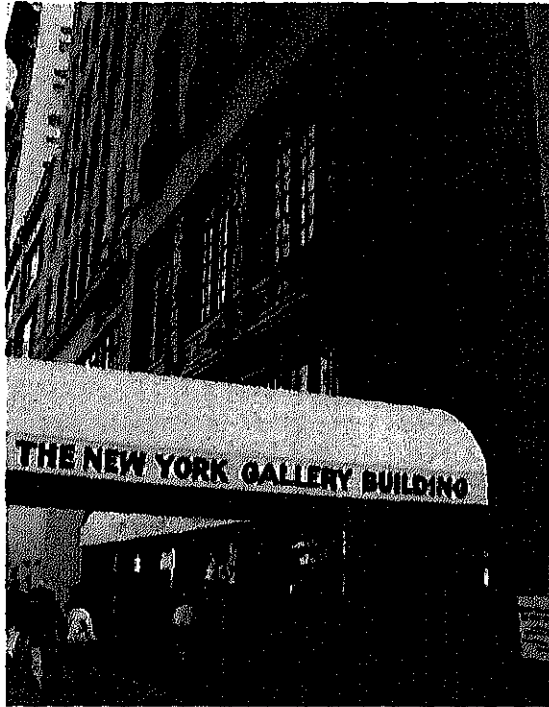


写真 7 N.Y.ギャラリー・ビルディング

(スライド)

その前にチャルシーの写真が続きます。

14丁目のミート・マーケットです。ひどい地域なのですが、画廊が急激に入って来ています。あと何年かでこの辺も結構いい画廊街になるのじゃないかと思います。これは14丁目のメイン・ストリートです。

ガラスで一番良いと言われる画廊です。

これは57丁目です。

画廊が28個人っているビルの一つです。

上から見ました。この通りにカーネギー・ホールなどが在ります。

これも画廊が入っている、ギャラリー・ビルディングと呼ばれるビルの一つです。

このあたりは高級商店街で、ブティックがいっぱい在ります。

N. Y.ギャラリー・ビルディングです(写真7)。

ペイス画廊と言いまして、非常に力のある画廊の一つです。

これはロックフェラー・センターで、向こうに蜘蛛の彫刻があるのですが、これは女性のルイス・ブルジョワの作品で、もうすぐお歳なので、多分模型を作って後は工房の制作じゃないかと思うのですが、結構大きい作品です。

アップタウン。有名なグッゲンハイム美術館で、カタツムリと呼ばれているのですが、フランク・ロイドが作ったので凄く有名なのですが、ミュージアムとしては本当に良くないです。観にくいスペースです。怖い、落ち着いて見られないと言うか…。

これは現代アートだけ扱っているホイットニー・ミュージアムの中庭です。

本当はさっきここまで見てもらうはずだったのですが、私が勘違いしていました。

これはジュライ・フォースと言いまして、独立記念日の御祭りの映像です。エンジョイして下さい。

これは世界中から帆船が集まってきた内の、一隻です。私のビルの屋上から写しました。

私の家の窓からこういう客船がよく見えるのですが、「歳を取ったら、一緒に乗ろうね」とよくワイフと言っているのですが、まだ乗っていません。

これはイーストリバーの、ダウンタウンの方です。ワールド・トレード・センターのすぐ傍です。

これは今年のゲイ・パレードの写真です。私の住んでいる所のすぐ傍が、ゲイ・ストリートというのがありまして、ゲイの人たちが大勢来る通りなのですが、そこに毎年、六月最後の日曜がゲイ・パレードの日で、ちなみに今年は70万人の参加者です。

虹の色は、ゲイの人たちのシンボル・カラーです。

これはパレードが終わった後で、彼らはパレードの間何時間もあの車の上で踊りまくっているのですが、もう終点に着いて戻ってくるところで、少し御疲れのようですね。このへんになると男性か女性か分からない。男性でも凄くきれいな人がいっぱい居まして。ボリスも見とれちゃう。

ここで写真を撮っている時に、4人のレズビアンの女性たちが居まして、きゃあきゃあ騒いでいまして、「うるさいなあ」と思っていたのですが、写真撮るのに良いスポットだからとそこに居たのです。

これ、分かりますか？ヒラリー・クリントンさんなのです。彼女もパレードに参加して来ていまして、ちょうど私が写していた四つ角からパレードを抜け出して車に向かうところなのですが、例の後ろに居たレズビアン女性たちが「ヒラリー！」ってすごく騒いだので、私の所へ来てくれました。それで私も写真を撮りました。

この時も黒いスーツのセキュリティの人達が居まして、女性が握手に行くのは良いのですが、男性が握手しようとしに行くとパツと止められて。でもなんであんな黒いスーツ姿で居るのかと思ったら、どうもあれが良いらしいですね。「居るよ」ということで。皆括弧が良い男性でした。

これはゲイ・パレードの夜で、彼らは11時頃から花火を上げるのですね。この花火が、私の家の窓からすぐ傍なのです。

これはブロンクス・ミュージアム・アートスクールです。この一角がアート・スクールだったのです。非常に大きなスペースで、朝から夜遅くまで制作が出来ました。

(スライド終了)

学校生活

私は日本とアメリカとイギリスの美術学校に行ったのです。まずイギリスの学校に行ったのですが、石膏デッサンというのは一切在りません。私が言った所は非常にアカデミックが強い所なのですが、日本と違って、かっちりしていると言うか、固い教育。N. Y. に行ったらあまりに柔らかい教育。

例えば、私が行った N. Y. のブロンクス・アート・ミュージアム・スクールで、クラスメイトが 20 人(写真 8)。一応、大学程度の美術教育を受けてきた人が入るクラスなのですが、年間の予算をどう使うかというのは生徒が決めます。一番人気があるのは、有名になった作家の話を書くというのなのですが、あとは他の興味のあるものを観に行くとか、そういうのをみんな年鑑の予算でまかなうのです。そこで、面白いエピソードがあったのは、20 人がほとんど全員違う作品を作っているのに、先生が来て講義とか一切無いのです。先生に訊くのは、そのクラスが一番の目的は、N. Y. で「どういう風にアーティストとしてサバイバルできるか」。各々が「どういう風にして N. Y. で作家になれますか」、と訊くのが主なのですが、まあ先生の答えは「とにかく展覧会に作品を出して、ニューヨーク・タイムスに 1 インチ・2 インチ、名前が出たら、大成功だ」と話していました。

ある時、吹き付けの作品を作っているクラスメイトがいて——その時に新聞を貼りますよね、吹き付けをしたくないスペースにマスキング・テープして。その時、新聞にエロ映画の広告が出ていたのです。ちょうど私が行った頃、エロが解禁になりました。解禁になって最初の映画で、非常に有名になったリンダ・なんとかさんという女優がいたのですが、彼女の二作目の作品が広告に出ていたのです。そしたらその男性が「お、彼女の新しい映画が出来たぞ。見に行きたい。」という話をしたら、男性が皆そばへ寄って行って、新聞広告を見に行つて、皆で「見たいねえ」という話になって、「じゃあ、皆で観に行こう」と。そういうのは自由なのです。興味を持ったものを生徒が自由に観に行くというのは。じゃあ、とりあえず絵の具等を片付け始めましたら、その中の一人が、「ちよつと待て。映画を見に行く代金を学校に払わせようじゃ

ないか。交渉に行ってくる。」と。私はびっくりしまして。授業中にエロ映画を見に行くのにその代金を学校に払わせる。筑波大学ではどういものでしょうか？そういうのは。(笑)びっくりしたのですが興味もあったので一緒にオフィスへ行ったのです。学生も正当性みたいなものを主張しまして、一生懸命説得するのです。結局学校の方の答えは、「女生徒は何と言っていいのだ。女生徒がOKだったらお金を出そう」と。結局、私達は自腹で行きました(笑)。女生徒が反対しまして。

そんなわけで、非常に自由な校風でやっていました。毎年9月になるとアメリカ中から美術教育を受けた若者が N.Y. へ押し寄せて来るのです。その場合——これは皆さんも興味あると思うのですが——、どうやって N.Y. の画廊にアプライするかというのが、現在でも36ミリのスライドが主です。作品のスライド。これを持って行って、画廊主に見てもらいます。

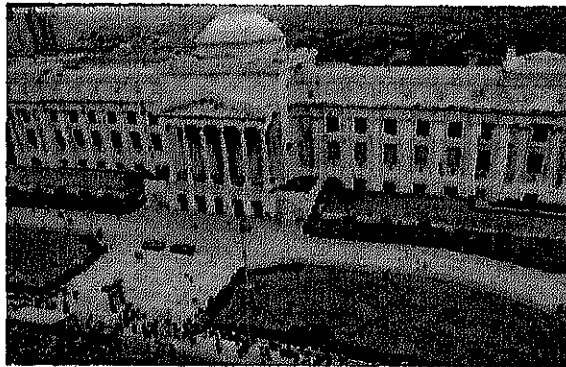


写真 8 ブルックリン・アート・ミュージアム・スクール



写真 9 ウェスト・ベス

特に9月は多くて。全国から卒業した生徒なんか来るものですから。それで住みついてしまいう人もいっぱい居ます。アメリカだけでなく、私みたいに外国からも来る人がいっぱい居まして。そういうわけで N. Y. には毎年「芸術家になりたい」、「N. Y. で成功したい」という人が押し寄せて来ますが、押し寄せてくるくらい N.Y. から夢破れて去っていく人が居るわけなのです。そうでないと N.Y. 全部がアーティストになっちゃいますから。ちなみに私が行っていたクラスは20人居たのですが、10年後 N.Y. で作品だけ作って生活しているのは結局私一人になっちゃいました。N.Y. の場合、非常に厳しいところもありまして、なんとか私がやってこられたのは次に見てもらおう、ウェスト・ベスという私が住んでいる所——そこはアーティストにとっては天国みたいな所で——、そこに住むことが出来たからというのと、あと一つは O.K.ハリスという画廊に入れたこと。この二つのラッキーが重なったので、N.Y. でも非常に楽にやっています。じゃあ、ウェスト・ベスの話をします。

ウェストベスの暮らし

(スライド)

これは私が住んでいるウェスト・ベスの屋上から写した写真で、最初に写したときはワールド・トレード・センターの川沿いに何も無かったのを思い出して頂けると思うのですが、これだけのビルが建ちました。これが 50 階くらいの高さです。こういうビルが何軒も建ちまして、ダウンタウンが格好良く構成されたのですが、今回のトラジディーであんなことになってしまいました。

これは川沿いから見たビルで、私が住んでいるのは、ここ九階です(写真9)。約50畳くらいのスペースです。私の場合子供が居ますので、別に二階にスタジオが在ります。そこも約 50 畳もらっています。

これが反対のコーナーの入口です。今はこちらの方が人も多くて——というも地下鉄の駅に近いのです——、ですからここからよく出入りします。

これは他の角度から見たのですが、鉄道が二つのレーンが入ってしまて、昔ここは貨車



写真 10 Soho center for visual arts

が通ってここで生産された製品をペンシルバニア・ステーションという大きな駅に運び込んでアメリカ中に渡った。今は使われていませんが、このビル自体がベル・テレフォンの研究所だったのです。ここで非常にたくさんの新しい発明が為されまして、余りにいろいろの特許を取るので独禁法に引っかかるということで、分散させられまして。ニュージャージーとか他の所へ移りまして、ここはアヴァンディングという誰も住んでいないビルになったところを、N.Y の州と市が共同で「アーティストの為のレジデンスに作り変えよう」ということで、計画を練り増して、それでお金を出したのがアメリカの政府です。

この中には画廊が一つ、劇場が二つ、大学が一つ、入っています。ダンスカンパニーの学校も入っています。

これはそのビルの中庭です。この丸いの何だと思いませんか。ファイアー・エスケープです。火事になったら隣の家に逃げ込んで、逃げろというベランダのファイアー・エスケープです。

これは私のスタジオです。片付いてないですねえ。(笑)

これが私のビルの道路一つ隔てたアーティスト・スタジオです。ロイ・リヒテンスタインのスタジオです。彼は本当にお金持ちで、でも学校の先生みたいなのですが、毎日時間通りに10

時頃来て6時まできちっと仕事をするという、そういう作家です。

これは私のビルの屋上から一回りしてみました。右回りに行きます。

これがマース・カニングハムのスタジオです。マース・カニングハムとマーサー・グランハムという二人が現代ダンス——モダンダンスを作った人で、グランハムさんはもう亡くなりましたが



写真 11 スタジオの風景

カニングハムさんだけ居るのですが、もう90歳以上のお年寄りなのですが、世界中から彼の所へ現代ダンスを習いに多くのダンサーが来ています。彼は歩くときはのたのたで、車道から歩道に移るのも大変なくらいなのですが、ダンスとなるとびしっとなって、飛び跳ねたりするので、やはりプロフェッショナルというのは凄いです。

これはジュライ・フォースの花火です。

ウェスト・ベスの話になりますが、385 世帯入っていて、約千人なのですが、その住む所の他にスタジオというのをくれます。これは家族構成によりまして、子供が大勢いたりするとスタジオ、仕事部屋をもらえたりするのです。家賃はだいたいこの地域のアパートやマンションの4分の1くらいで、その他にユーティリティ——水道・電気・その他全部、ただです。修理費も全て含めて。ですから自分たちがお金を払うのは電球の球を換える時くらいしか使いません。あおとは全てただです。

このスタジオに入れる条件というのは、アーティストであれば良いのです。ですからアーティストである証明ですね。例えば小説家だったら本を出版しているとか、ダンサーだったらパフォーマンスをやっているとか、音楽家だったらコンサートをやっているとか。そういう証明があったらアプライできます。ただし、今はもう出る人がなかなか出なくて、亡くなっても一等親と言うか、子供とか入って来られます。そんなでお父さんお母さんは亡くなったけれども子供が入ってきてウォール・ストリートに勤めているという人も実際にいるのですが、とにかくなかなか出ないという状況のようです。

ニューヨーク アート事情

この他にアートの話になりますが、N.Y で何とか僕がアーティストとしてやってこられたのはさっきのO.K.ハリスという画廊に入れたからだと言いましたけど、このO.K.ハリスというのは、ソーホーに1969年の秋に三つの画廊がオープンしまして、その中の一つの画廊なので、ソーホーの代表的な画廊です。

そのオーナーのアイヴァン・カーブというのはあのレオ・キャステリ——皆さんご存知ですか？要するにN.Y.のアメリカ的な美術を世界的に押し上げた人です。ポップ・アートを育てた人です。例えば、アンディ・ウォーホルとか、リキテンシュタインとか、ローシェンバーグとか、ああいう人々を育てたのがレオ・キャステリです。そこで右腕として働いたのがアイヴァン・カーブといいまして、O.K.ハリスのオーナーなのです。彼がソーホーに画廊を作り始めた。

と言うのは、ウェストベスという私が住んでいる地域はアーティストがたくさん住んでいた、また今も住んでいる地域なのですが、家賃が高騰しまして、すぐ南のソーホー地区、ここにたくさんロフトと言われる倉庫が在りまして、そこは中小企業が税金の関係等で他のステートへ移っ

で行きました。やはりアヴァンディング——廃墟になっていた所に、アーティストが住み始めまして、それでスペースだけは広いものが在るのです。だけどなかなか画廊で個展が出来ない——というのが、90 何パーセントの作家が個展が出来ませんから。そこへ住んだ作家が広いスペースの壁を白く塗って、自分の作品を並べて、友人やコレクターとか呼んで、小さくパーティーとかをして…、というのがソーホーの始まりです。そういう広いスペースを見た画廊、アイヴィン・カープさんというのもそうなのですが、「これはいい」ということで、画廊を 1969 年の秋に三つがスタートしたのですが、70 年には 20 軒くらいありまして、71 年には 40 件とか、倍々に増えていきまして、画廊街が出来上がりました。

そういう画廊に入るといにはどうしたらいいかという、僕の場合はまずさっきスライドで見ました、最初に私がソーホーで個展したというソーホー・センター・フォー・ビジュアル・アートという所ですが、そこは新人の為に展覧会をしてくれるというので、すぐにスライドを持って行きました(写真 10)。そしたらそのスライドが本家と言いますか、現代美術館の方に回しまして、館長さん達が検討した結果、「面白いじゃないか」ということで、その作家のスタジオまで館長自ら見て回ったのです。これはアメリカ東海岸の八個の州を全部見て回ったのです。非常に根性要ることですよね。こういう所まで行って現物を見て。

それで現物を見て決めた展覧会がありまして、それは半年間だったのですが、その時に“New York Times”の記者が来て、展覧会を取材してくれたのですが、その取材してくれた記者が——“New York Times”にはだいたい 6~8 人の美術記者が居まして——、そのボスだったのですよね。彼が見に来て、約 50 名の作家の中から 5 人の作家を——アメリカというのは 1 等賞 2 等賞というのは殆ど無いのですが——、「もし賞をあげるとしたら、私はこの 5 人を選びます」と言っ、て、“New York Times”に書きました。その中に僕が入っていたのです。彼が一番良いと思って書いた人は凄く長い評論が書いてありまして、二番目が少し、その半分くらい。で、後三人はちょっと書いてあるだけなのですが、タイムスの芸術欄一面の時、写真を載せるのですが、三つ載りまして、彫刻、建築、それにペインティング。彫刻とか建築はこの展覧会とは関係ないのですが、そこで僕達の展覧会の写真を載せるに当たって、一番彼が好んだ作品は、縦長の絵なのです。ですから新聞に、他には二つ横長の写真がありましたから、縦長の絵を入れられない。二番目の人は横長の絵なのですが、絵がほかにやほにやなんですよ。当時は白黒で、載せてもどういふ絵かわからない。で、僕の(作品写真)がちょうど横長で、これから見てもう穴のシリーズの、地下鉄の絵なのですが、ピッタリということ、それが載りましたから、もう次の日から電話なんかすごくて、「扱いたい」とか、「売ってくれ」とか。それで私は食べていけるようになりました。

ですから何かチャンスがあった時に今までやっていた作品をドンと見せられるように全部揃えておけると良いなど。通常努力をやっていないと、何かのチャンスがあったときに見せられないと、続かないのですね、幸運が。ですからそれは一生懸命やっておかないといけないと思います。

じゃあ、私の作品に移ります。

佐藤氏作品

(スライド)

これは「穴の時代」の作品です(写真 12)。これはシルクスクリーンを使いました。だいたい大きさは 180 センチ四方くらいだと思います。

これらはみんな学校で描いたのですが、その時びっくりしたのは、授業は大体 3 時半頃終わるのですが、アメリカ人の生徒はどんどん帰ってしまうのです。夜の十時頃まで制作できるのですが、たいがい残っているのは三人いまして、御茶を飲みながら笑ったのですが、ドイツ人の男性、ユダヤ人の女性、それで僕なのです。冗談みたいにドイツ人とユダヤ人と日本人という勤勉な民族の生徒が残って、いつも描いていましたね。(笑)

これらは地下鉄のシーンなのですが、タイムスなんかに出でずごく売れるようになってオーダーなんか来るようになってからは途端に氣力が失せまして、巧くは描けるのですがなかなか何でも描く気が起きなくて、版面を四点、タブローを 12 点描きました。それで、もう止めてしま

いました。これはちなみに油絵でなくてアクリル画です。

これが版画です。

この辺は全部、私も若かったので、自分で摺りました。

これらの「穴」のシリーズはロンドンから続いているのですが、私4年間 N.Y.に行く前にロンドンに居ましたので、その辺から続いているのですが、その話に行くとき時間が無いので、これを進めます。これはさっき言ったソーホー・センター・フォー・ビジュアル・アートの個展の会場です。

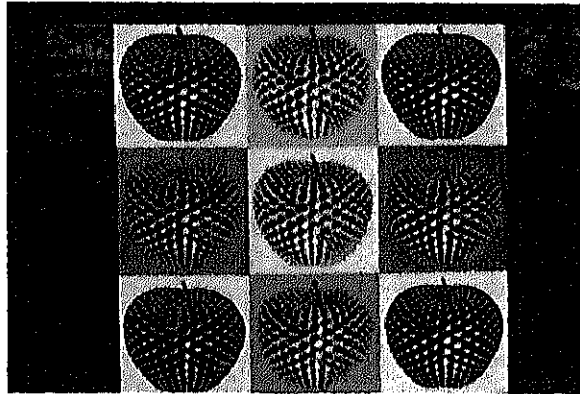


写真 12 「穴の時代」の作品

これはテネシス・テート・ユニバーシティで、そのユニバーシティの画廊です。

これらは油絵です。

これはリトグラフですが、リトグラフ、エッチング、木版もしました。これは彫刻です。

これはブロンズから始まって、銀色の(作品)はみんな粘土です。あと蠟(ろう)です。

これは石膏で作ったものにメッキをしまして、これは吹き付けです。

これは大理石です。

ブロンズです。ニッケル・ブロンズと言いまして、色々の合金で銀と金と言いますか、真っ黄でなくて真っ白でない、そういう色にしました。

これはステンレス・スチールです。直径 80 センチです。

守屋先生がいます。

ニュース・スタンドです。80 年代です。これはビデオでも言いました。一応、私が入ってきた言葉は、10 カ国は入っています。

これがパイプルになっています。ラスト・サパーですね。「最後の晩餐」に出席した人達が入っています。

これは左右対称になっていまして、片方が赤いアウトラインで描いてありますが、ひっくり返した文字がまた正転したりします。

これだけ日本語入れました。わかりますが、右の方...。これも反対にしてあるのですが片方は英語の雑誌で片方は日本の雑誌が入っています。

五点の中の一点です。

これは他の七枚組みを一点ずつ写しました。

これは木版の線を全部彫ったのです。それに私が手彩色で色々色を乗せまして。

これはリトグラフです。

これはコラージュです。

シルクスクリーンです。120 色ぐらいですね。

こういうリトグラフとか版画を切り刻んでコラージュにしたのですが、コラージュにしたら版画より値段が安くなったという。(笑)

これ木版で、30 版の色を、版を作りまして、38 回刷りました。

これ、鉛筆ドローイングです。7 枚組みで、小さい鉛筆のドローイングをしました。

これは鉛筆とコピーのコラージュです。

これはペインティングなのですが、雑誌の中にあるのを、私の絵にしました(写真13)。

この毛皮のコートなのですが、『ELLE』で、“red hot trends sun kissed beauty”。夏の言葉が入っています。これ、『M』というマガジンがありますね、表紙の、『M』というのは男性の為の本で、女性の裸なんかは一切出ていないという

固い本なのですが、それをひっくり返しまして、『W』にしまして、本当の本は“the civilized men”とあるのを“woman”にしまして、“men and their toy”を“woman and their toy”にしまして、下の三つはフェミニンの感じを受けるものを描き入れました。というわけで、雑誌の表紙まで行かまして、中身とか、それを自分なりに変えて、三枚の連作をしました。ですからニューススタンドよりすこしディテールに入った作品です。

これは左に在ったのを、僕が絵にした原画です。

これはワイフとの競作の絵です。非常に小さい作品です。一ミリの線を切ったり貼ったりしています。

これは鉛筆ドローイングをこういう作品にしました。

私のコラージュを家内が作品にした、非常に小さい作品です。

(スライド終了)

1%が支える美術

今私の作品を見てもらいました。結構アメリカ的だと思うのですよね。多分皆さんアメリカの美術界または美術は非常に前衛的というか、抽象画に始まって、日本の具象みたいなのはなくて、新しい作品だけがアメリカの現代アートだと、それがアメリカ中に行っていると思っただろうのですが、じつはロシアから亡命した二人の作家が在りまして、彼らがアメリカ中の各ステートにランダムにチューズした人たちに白くらの質問をして、それを全部まとめて本にしたのがコピーで展覧会と一緒に売っていたのを買ったのです。それを見て驚いたのは、例えば「あなたはこういう絵を好きか」というのから始まって、「美術館には年間何回行きますか」とか、「どういう色が好きですか」とか、「どういう絵を家に飾っていますか」とか、そういうのを全部まとめたのですが、一番驚いたのは、僕なんか知っているアメリカ人というのはやっぱり現代アートが好きで人達なのですが、彼ら一般の多くのアメリカ人が好きなのは、例えば絵の場合は、水が描いてあって、緑が在って木が在って、空には白い雲が在って、動物が少し居て、人間が居た場合は服を着ていなければいけない…というような非常に保守的なものが好きというのが圧倒的に多くて、ロシアからの作家たちは比喩を込めて、一番好きなパーセンテージが多かった絵を描いたのです。それは百年前の絵みたいに、今言ったような湖の風景とかそういうのです。本当にわずか1%に満たない人達が、アメリカの現代アートを支えているのです。彼らが引っ張っていると言うか、新しいものに興味を示してサポートしているので、アメリカが世界で一番現代アートを発信できる国になったのです。

そうなるに当たって、コレクターも余りに新しいものとかはなかなか買う気にならないですよ。でも先述のように画廊の力が非常に強いですから、画廊主の力が大きい。ですから、画廊主が薦めた作品なら余り良くなくても、「分からないけどとにかく買ってあげ」と。それで買っておいいたのが、何年か後に凄く高くなっているとか、そういうことはありますが、画廊主を信用しないと買えない、ということがあります。

日本の場合、一つのエピソードがありまして、ジャスパー・ジョーンズが最初に南画廊という銀座の画廊で個展した時に、清水さんという画廊主が、ジャスパー・ジョーンズを呼びまして、個展をしたのですが、60年代ですから、ポップ・アートが世界的になっていたのですが、日本ではまだ市民権を得ていなくて、勿論誰もジャスパー・ジョーンズなんて買う気が起きない。でもせっかくなので呼んだのだから、お金もかかりますし、一点でも売ろうと、彼が勅使河原蒼風さんにお話をしまして、勅使河原さんが「こんな絵は見たこともない、飾る気も起きない」と言ったのを、何とか言いくるめて。それが百万円だったらいいのですが、2~30年後は、億になりました。大きい作品ですから。こういうのがアメリカでは頻りにあったということで、日本では私の知る限り一件しか無いのですが、そんな具合で。多くのアメリカ人というのはまだまだ保守的で、現代

アートを飾る人は少ないわけです。ですが、1%の力が世界を引っ張っているという風になっています。

では質疑応答です。何でも訊いてください。

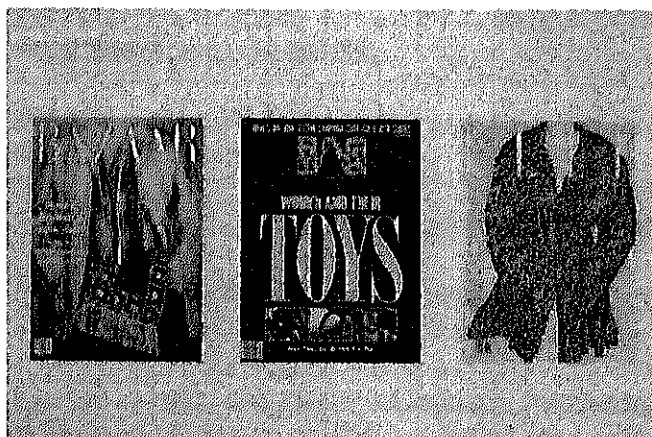


写真 13 作品 ELLE painting

質疑応答

質問者 1: 現代アートは学生の頃から好きだったのですか。

佐藤: 私が君達くらいの時に、ポップ・アートというのが世界的になりまして、初めて『美術手帖』とかを見まして、本当に驚きまして、「新しいなあ、面白いなあ」ということで、こういう作品を生み出す国に是非行ってみたいとすぐ思いました。その時にアンディ・ウォーホルとか、ジャスパー・ジョーンズとか大きく載っていて、「将来こういう人たちと展覧会を一緒にしたい」と思いまして、君達くらいの時に。行ったら意外と、70年代、あの「穴の時代」に76年に隣同士の展覧会で、美術館に飾られて、夢が叶いました。ですから、あんな時代でも「行けば何とかなる」というところがあって、やはりそのとき夢を持ったから実現したというか、「こんなの出来っこないよ」と思ったら、夢は実現しなかったと思います。

質問者2(守屋): 佐藤さん、ちなみに今の200号くらいの大きさ、一点いくらくらいですか。

佐藤: エー、高いです。(笑)ただ、最近は版画をしたり色々していますので、油絵の方が時間的に制約がありますので、もう一つは油絵の一点の中に調べたりと時間がかかりまして、一点仕上げるのに何ヶ月もかかって、ここ三年くらいは平均一年の間に一点半くらいで、二点描けたら良い方なのです。それで食べていくのは大変なのです。何とかそれと版画で食べていっていると。だからそれで大体の推測はつけて下さい。

質問者2: 7点の連作がありましたよね。あれで1500万円くらいですか。

佐藤: そんなものじゃないです今は。売れた時は10万ドルです。10年後は30万ドルです。この前のフジテレビギャラリーで、ビデオに出ていたのが、一点で1700万。なせばなるものです(笑)。

若い内は特に夢を持ってやってください。特にアメリカへ行くのも、ヨーロッパへ行くのも、夢を実現するのは私たちの頃よりも楽じゃないかと思うのです。気持ちの持ちようでもうにならうというか。まあ私の場合楽楽家といえど楽楽家ですけども。アートの場合、楽楽家のことは

良いことだと思います。ですから失敗したらまたやり直せばいいわけですから、前向きにやっていると、特にアメリカという国は——今回あんなことがありましたけれども——、もしアメリカという国が世界の中に無かったら、本当に閉塞感というか、夢を持った人が——亡命する人が政治的にね——、行く所が無いわけなのです。受け入れてくれるアメリカというのはやはり夢が実現できる国じゃないかと思えます。

質問者3: お子さんがいらっしゃると伺いましたが、お子さんはどういったナショナルリティーで育ってこられたか伺いたいのですが。

佐藤: 二人の男の子が居ます。現在 23 歳と 20 歳。彼らは、悔しい位学生生活をエンジョイしています。

まず国籍は日本とアメリカの二重国籍です。彼らの教育されてきた仕方は、一冊の本になっちゃうくらい、日本と違います。特に下の方なんかはエピソードが山ほどあるのですが、高校になると、背中に羽が生えたように N. Y 中と飛び回っているのじゃないかと遊びまわって、それはもう広い世界。例えば彼が行った高校には、アメリカに連綿とある青春映画のような所で、ガールフレンドが出来たのですが、そのお父さんはトム・ペティという 20 年以上ポップミュージシャンのトップランナーで、俳優としてもケヴィン・コスナーなんかと一緒にやるような人なのですが、ロスアンジェルスに豪邸が二つあるのですが、そこに呼ばれてひと夏遊びまわるといふ。それで色々な所に行って遊んで帰ってきたという。「一番ロサンジェルスでよかったところはどこだ」と訊いたら、「彼女の家だ」と言うのですよ。それくらい青春を謳歌するというか。残念ながら私に似て学科の方はダメで、美術の方は大好きで、二人とも美術の大学へ行っているのですが、頭の中は 90 何%アメリカ人だと思います。

ただ、ワイクの至上命令で、小学校一年から毎年夏、日本に来て体験入学とかさせまして、日本語も一応喋れます。上はもう大学卒業したのですが——また他の大学へ行っているのですが——、彼も弟もお陰様で日本と日本人が非常に好きになりました。一応夏に無理をして毎年連れて来たのがこれで成果が出たというか、「私達の希望に沿っているね」と。顔は日本人なのですが、心の中は 90 何%アメリカ人。でも日本も大好きという青年に育ちました。多分、筑波大学を受けたら最初のところで落とされると思いますが。(笑)

質問者4: アメリカやイギリスの美術学校で、入り方や修学期間や卒業の仕方とか、違いを教えてください。

佐藤: 例えばアメリカの場合、転校が非常に簡単です。ハーバード大の教授が私達の子供の学校に講演に来まして、大学の教育について話してくれたのですが、一つには、ボストン近郊にはいっぱい大学があるのですが、その大学の統計で——9 月に入学します。レーバー・デイというの後に学校が始まるのですが——、クリスマスのホリデーになるときに、50%以上の新生入生が学校を替えちゃう。理由は、「大学行ったのだけれど自分の思うような大学ではなかった」と。通常彼らは平均 10 校くらい受けるのですが、たいがい受かるような所を選んでします。日本みたいに無理しない。普通の生徒は 10 校くらい受けて 8 校くらい受かっちゃうのです。その 8 校の中で自分の行きたい学校選んで、それで「行ったらどうも自分のイメージに合わない」ということになったら他の受かった大学にお願いして移る、とかいうことが可能なのです。

僕の場合は、ちょっと違っていて、出来るだけ学科が少なく、絵を描いているだけで良いという大学を選びました。非常に楽だったです。入学は、僕の場合一番スカラシップをくれる学校に行きました。お金が無かったので。もう一つ気を付けたのは、長い時間、広いスペースで作品を作れる、そういうのを選びました。

質問者4: その学校の資金はどこから出るのですか。

佐藤: 卒業生が寄附をするのです。ですから優秀な生徒が出た学校ほど、お金が集まりや

すいのです。殆どの大学が奨学金をたくさん出しています。もう一つは国とか州とか、お金が
余り無くても、選び方で、殆どただで卒業できるのです。実際、家の上の息子なんか寮費も食
費も全部入って、90%くらい色々貰いまして卒業しましたので、他の大学へ行っているの
ですが、親としては助かります。

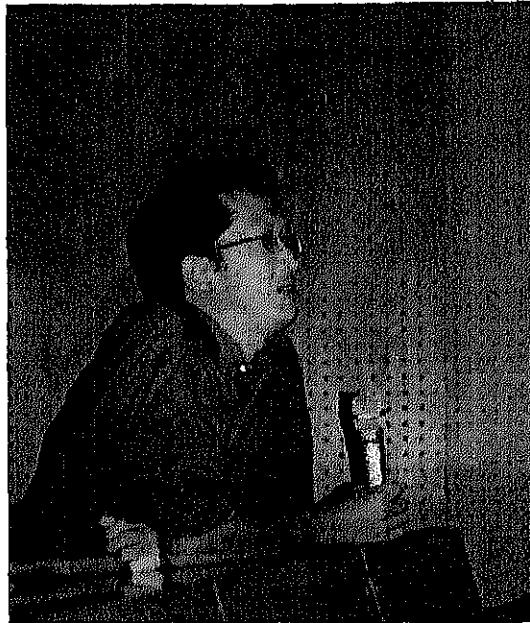


写真 14 質問者

質問者5: 盛んにN. Yで食べてきたという話があったのですが、ご自分の話は生臭くなる
ので結構なので、大体どのくらいの収入があれば食べたと言えるのか聞かせて頂きたいのと、
画廊の契約というのは単年契約か複数年契約かお訊きたいのですが。

佐藤: 基本的にどこに住むかということが大きいのです。危険な地域に住むと家賃が下が
ります。そうでない所は高くなりますから。アーティストなんかは広いスペースが必要になりま
すから。僕が思うに東京と余り変わらないと思います。僕なんか住んでいるところは本当に安
いですから助かっているのですが、物価というのは東京と変わらないですから、後は暮らし方
で。若者なんかはマンハッタンでない所に、ブルックリンとかクイーンとか住みますから、部屋
代が安くなりますから、やりいいということはありません。

質問者5: ギャラリーに20人契約しているということは、ギャラリーの売上が年間何億かあると
したら、それで20人賄わなくちゃならないですよ、そうすると「一人の作家がどれくらいの売
上が欲しい」というギャラリー側の希望がありますよね。その線まで行かなければギャラリーの
中から脱落していくということなのですか。

佐藤: 昔は契約した場合、生活費も払ってくれるという契約の仕方も多かったのです。近年と
言うか、私の行った70年代頃からそういう契約は少なくなってきました。普通の画廊と作家の
契約というのは「二年に一度、個展をしてあげるよ、個展をするに当たって経費は全部画廊が
持つよ」という契約です。ですから生活費まで見るとか作品を全部買い上げるとか、そういうの
は稀なケースになっています。ですから画廊に契約して生活が保障されるという人は——有
名人は別ですけども、有名な人は買い上げてもらったりとかしたがりませんから——、殆ど
無いと考えてくれていいです。生活費まで見てもらうということはありません。

質問者5: 50%くらいギャラリーが持っていくということですか。

佐藤: 通常50%が基本です。実際個展してもらおうと分かるのですが、50%取られてもしょうがないと思います。画廊がすごい経費かけますから、50%くらいもらわないとやっていけないということでしょう。また、50%取られてもちゃんとした画廊で個展開けば次が続きますから。やはり誰も50%取られても文句を言う作家はいないと思います。

質問者6: 「なぜアメリカ人は絵を買うか」というのをお願いします。

佐藤: まず、アメリカの家庭ないしは若者の部屋に行っても分かるのですが、絵画飾ってない所というのは無いのですよ。どこの家に行っても、それがその家の収入ランクとか、好みによって、みんな違うのですが、学生なんかはポスターとか、そういうのを飾っていますが。まず彼らが生まれたときから家庭に絵があるわけですから、頭の中へ人っているのじゃないかと思うのですよね。

なぜそんなにどこの家庭にも絵が在るのかというのは、歴史的に見たら、石の家が多かったのですよ。アメリカのルーツのヨーロッパにしても、ですから石の壁は冬に非常に冷えますし、冷たい感じですよ。それをカバーするというか。お金のある人は昔の権力の象徴でタピストリーを。あれは保温にもなりますから。タピストリーの大きいのを壁に掛けたか。そういうところから始まっているらしいです。それが連続と続いて、例えば現代の、画廊で見たでしょう、みんな大きい絵ばかりでしょう。家で飾れませんよね？そういう大きな絵は会社が買うのです。これは税制の違いで、タックス・ディダクタブルなのです。アートを買った場合は、税金で落とせるのです。会社も「税金で払うよりは作品を買っておいたほうがいいや」ということで、会社も買う。お金持ちは自分の為を買う。そういうわけで、絵の需要が、多いわけなのです。とにかくどこの家に行っても会社に行っても絵があるから、実際に自分が部屋を借りたときにやっぱり「何の絵を飾ろう」ということが出てきちゃうわけですね。需要があると。スペースも日本とちよっと違いますよね。白い壁がやたらに多いので。

司会: 色々と佐藤先生に短い間にお話を伺いました。創作活動の制約という部分でも、佐藤先生そのものの中に出てきたものが彫刻から何からされているということがお分かりになったかと思います。やはり、文化の違いもありますでしょうが、向こうの受け皿の環境、歴史を作っていくというか、自分史を作るという意味が、もっともっと訊いていけば、教えて頂ける部分があるかと思います。

時間になりましたので、痛ましい事件があったにもかかわらずお越しいただいたことに感謝して、お別れしたいと思います。ありがとうございました。(拍手)

(編集 岡野素子)

2001年9月11日、アメリカ合衆国ニューヨーク世界貿易センタービル (World Trade Center) に旅客飛行機が追突し、ビル2棟は完全に崩壊した。同日中にワシントンの国防総省、連邦議会にも飛行機が追突した。一連の事件を指して「同時多発テロ事件」と称する。